

# カミュなんて知らない

2006(平成18)年2月17日鑑賞〈東宝東和試写室〉



監督・脚本＝柳町光男／出演＝柏原収史／吉川ひなの／前田愛／中泉英雄／黒木メイサ／田口トモロヲ／玉山鉄二／阿部進之介／鈴木淳評／伊崎充則／金井勇太／ただかゆうこ／本田博太郎（ワコー、グアバ・グアボ配給／2005年日本映画／115分）

## 第2章

面白くてタメになる

……いかにも思わせぶりのタイトルに魅かれたが、その内容はスゴイのひとつこと。「人殺しを経験してみたかった」ということだけで、ホントに主婦を殺せるのか？ そんなテーマの解釈に悩みながら、『タイクツな殺人者』のクランクインを目指して頑張る学生たちの姿から、私たち団塊の世代は何を学ぶことができるだろうか？ カミュばりの「不条理な世界」などと難しいことを言わなくても、何が真実で、何が虚構かを見極めることは難しいもの。主演の交代劇というハプニングを経て、やっとクランクインすることができた劇中劇に、「アクション！」の声がかかった。そのスクリーンいっぱいに広がる主婦刺殺現場の生々しさを観れば、その見極めの難しさをタップリと思知らされるはず……。

### 団塊の世代には魅力的なタイトル……？

この映画のタイトルにある「カミュ」とは、あの変な小説(?)を書いたフランスの作家のアルベール・カミュのこと……？ そう思うのが、私たち団塊の世代のおじさん、おばさんたち。

今から50年近く前、よほどの文学青年、文学少女で、大学の文学部へ入った人であれば、当然『異邦人』ははじめカミュの作品を全部読破しているだろうが、断片的知識の吸収の下で、知ったかぶりをして芸術論・文学論をぶっていた団塊の世代の人たちも多いはず。

しかし、そんな半分メッキのはげそうなインチキ文学青年、少女でも、第2次

世界大戦後フランスの実存主義哲学者たちにもはやされたカミュの「不条理の世界」という言葉は、カフカの「不条理の文学」と同じように必ず知っているし、そのおぼろげなイメージは持っているはず。しかし、こんな現代文学はもちろん、世界文学全集すら読まなくなった今ドキの多くの学生諸君が、「カミュなんて知らない」と言うのは、ある意味当然のこと。そんな今ドキの大学生にとって「カミュ」の「不条理」とは……？

## 「SF研究会」と「映像ワークショップ」

本広克行監督のメチャ面白かった「サークルもの」映画(?)が、『サマータイムマシン・ブルース』(05年)、『シネマルーム8』150頁参照)。これは夏休み中の四国学院大学のキャンパス内で撮影したらしいが、このタイムマシンをめぐる物語をつくり出したのは、当然「SF研究会」というサークルだった。

他方、この『カミュなんて知らない』のテーマは、2000年5月1日に愛知県で現実に起きた高校生による老婆の殺害事件。周囲の誰もが「普通」と評したこの高校生は、「人殺しを経験してみたかった。人を殺したらどうなるか、実験してみたかったと言ってもいいです」という動機で老婆を殺したらしい。しかし、それって本当……？ そんなことがありうるの？

その解釈に悩みながら、映画『タイクツな殺人者』の製作に奔走しているのは、都心の大学で「映像ワークショップ」を受講している学生たち。1967年から約3年間、大阪大学のキャンパスの中で「裁判問題研究会」を基盤として学生運動に明け暮れる毎日を過ごしてきた私にとって、上記の「SF研究会」というサークルも「映像ワークショップ」というゼミ(授業)もすごく親しみのあるもの。何とか無事にクランクインできることを願いたいものだが……？

## 大学のサークルとはいえ堂々たるもの……

『タイクツな殺人者』を製作する「映像ワークショップ」の幹部学生たちは、まず監督の松川直樹(柏原収史)と助監督の久田喜代子(前田愛)、中根(金井勇太)、そして撮影担当の本杉(阿部進之介)、制作担当の上村(鈴木淳評)、吉崎(伊崎充則)、美術担当で社会人学生の大山(田口トモロヲ)、さらにスクリプ

ターの綾（たかだゆうこ）たち。そしてその指導教授は、元映画監督の中條（本田博太郎）だ。

プロではなく学生のサークルだからとバカにはしてはいけない。私は、阪大法学部の学生たちで組織している法律相談のサークル「法律相談部」の面倒を長年見ているが、その相談能力に限界はあるものの、最近の弁護士の相談能力の低下と対比すれば、学生たちの法律相談だってそれなりに堂々としたもの……？ この『カミュなんて知らない』を観ていると、上述した幹部学生たちの『タイクツな殺人者』製作に向けるエネルギーはもとより、その技術面における優秀さはビックリするもの……。

## モテモテの松川くんだが……

学生サークルとはいいながら、やはりトップの監督の立場にある松川は、映画の製作においてそれなりのリーダーシップを発揮している様子。また、その才能・容姿からも女の子にモテモテのようだが、松川はそれを変に隠さず、かなりあけっ広げ。

クランクインまであと5日と迫った中、松川は「監督業でいっぱい、いっぱい」状態だが、そんな彼を毎日のように煩わせるのが長年の恋人のユカリ（吉川ひなの）。その愛情の押し売り（？）や世話女房的な行動に松川もうんざりだが、松川はお金の面でこのユカリに頼っているためか、ユカリに泣きつかれるとやむをえず……。

もっとも、いくら結婚を迫られても「俺は結婚はしないと言ったはずだ」ときっぱり言いきるところは、さすがエライもの……？

しかし、ユカリがじっと見守っている（見張っている）ことを甘く見た松川が、これも一風変わった女性スクリプターの綾と意気投合し、綾が松川の部屋に泊まりに来たところをユカリが訪れたから、こりゃ大変……。

さらに松川は、久田が自分に好意を持っていることを知ると久田ともキスを交わしたり、お忙しいこと……。

若いから仕方ないのかもしれないが、普通の大人の感覚からすれば「ふしだらな」という形容詞がピッタリのサークル内の男女関係が縦横無尽に（？）展開さ

れていく。もっとも、キャンパス内の男女関係だけに限っていえば、この雰囲気は私たちの学生時代と全く同じようなものだと私は思っているが……。

## 久田女史の男性観は……？

この映画で最初から最後まで出ずっぱりとなっているのが、女性助監督の久田。家庭の事情とはいえ、クランクインまであと5日という状況の中で、突然主演を降りてしまった俳優の後ガマ探しから、個々の俳優の演技指導まで、彼女が現実に果たしている役割は実に大きいものがある。さらに、彼女は将来も「この道」で生きていきたいと真面目に考えているため、『タイクツな殺人者』の主人公の殺人の動機や彼の心理状態の分析には心底から悩み、松川監督との議論もヒートアップ気味。

そんな久田の現在の恋人は、映画づくりと全く関係のない山岳部の西浦（玉山鉄二）で、周りから見てもこの2人の仲は非常にうまくいっている様子。しかし、山岳部の合宿に出発する西浦を見送った久田には、クランクインを控えた5日間の間にさまざまな男性問題が発生……？

その第1は、久田に好意を寄せている撮影担当の本杉。第2は、演劇サークルから主演の代役として起用した、ちょっとオカマ風で変人っぽい池田（中泉英雄）。そして第3は、久田がホントは大好きな監督の松川。

久田を含めてその当時の学生たちはみんな若いだけに「その方面」における行動は素早いのが取り柄……？

わずか数日の間に、3人の男とキスを交わした久田は、合宿から帰ってきた西浦に対して、チャペルの中で「2人の男とキスをした」と涙ながらに打ち明けたが、これって半分ホントで、半分ウソ……。

久田の男性観は、一体どうなっているの……？ そして、その告白を聞いた西浦のこれに対する対応は……？

## 「ひなの」は怖い女……？

ベタッと松川にへばりつかんばかりの松川の恋人がユカリ。ユカリは「松川命」だから、松川を追いかけて彼の通う大学に転入してきた女性で、実家のある

金沢の両親には、5年もつき合ってきたのだからと結婚のオーケーまでとっている。「松川が他の女と寝たら殺してやる」とまで言うストーカー的なヘンな性格のユカリを演ずるのは、年末年始にホリエモンの60億円のプライベートジェット機への同乗で大きな話題を呼んだ、美人女優の吉川ひなの。

これだけベツタリとへばりつかれ自由な時間を奪われ、感情丸出しのメールを再三送りつけられたうえ、浮気(?)の現場を押さえられた松川は、そりゃ大変。挙げ句の果てに、屋上でのリハーサル中、1人手すり近くをフラフラとさまよっているユカリを発見した松川が「すわ自殺か!」と思って駆けつけたのは当然。しかしその結果、屋上から落下したのはユカリではなく、これを助けようとした松川だった……。

警察の調べに対して、ユカリは「松川を突き落としたりどうなるのか一瞬試してみようと思った。その後の記憶はない」と供述したらしいが、果たして、その瞬間のユカリの心の奥底はどうだったのだろうか……? 吉川ひなのみたいな美人にまとりつかれることは男なら誰でもイヤではないはずだが、こんな怖い女はやはりヤバイ……? ホリエモンこと堀江貴文元社長は、本物の吉川ひなのをどう見ていたのだろうか……?

## 黒木メイサもヘンな女……?

この映画には、ユカリと並んでもう1人ヘンな女性が登場する。それは『同じ月を見ている』(05年)でヒロイン役を演じた、沖縄生まれの美女黒木メイサ。彼女が演ずるのは、映像ワークショップとは関係のない美しい女子学生レイで、2年前に妻を亡くした中條教授が、時々キャンパス内で見かけて気にしている女性。このレイと大山が親しげに話している姿を授業中の教室の窓から見た中條は、大山を通じて3人で食事をする約束を取り付けることに。

いくらおじさんになっても、若い綺麗な女性とデートできると思うと心躍るのは当然。中條は年甲斐もなく(?)顔にクリームを塗りつけ、白いスーツに身を固めて、ちょっとおしゃれなフランス料理店へ。

気を利かせた大山は「僕はちょっと打ち合わせで……」と席を外してくれたので首尾は上々……。静かでない雰囲気の中で、ワインを飲みながら楽しい会話に

入ろうとしたが……。

フランス料理のコースには、まずスープが付きもの。ところがここにおいて、美女のレイのスプーンの持ち方は？ またズルズルという音をたてながらのスープの飲み方はナニ……？ さらに驚くべきは、将来の仕事のために彼女が望んでいるものとは……？

用事を終えた大山が席に戻ってきてからはもう最悪。一体何が最悪なのかは、映画を観てのお楽しみに……。美女に対する幻想が一瞬にして崩れ去ることはよくあることだが、せいぜい免疫力をつけておかなければ、中條教授のような弱い男は打ちのめされることに……。

## ホンモノか虚構か、すごい映像に注目！

この映画はすごくよくできた映画だが、そのハイライトはラスト15分ほどの主婦殺害事件の撮影シーン。金づちで主婦の身体や頭をメッタ打ちにしても容易に死なないため、今度は包丁を持ってきて胸をメッタ突きにする主人公である制服を着た高校生の顔には、何ら恐怖の表情は浮かんでいない。こんな行為をいつまで続け、さらにその後彼はどのような行動をとるのか？ そして、この殺人事件の結果はどうなるのか？

そんなスリルと緊張感が広がっていく中で展開されるラストの映像はものすごい迫力。そしてそのホントの結末は……？

私はよく知らなかったが、この映画を久しぶりにつくった柳町光男監督は、すごい実績を持ちながら監督業を半分引退したような状態で、2001年から3年間、早稲田大学で客員教授として「映像ワークショップ」をやっていたとのこと。したがって、この映画に登場する中條は、柳町光男監督の分身のようなもの……？

柳町光男監督が近時の体験を踏まえて、久しぶりに監督したこの映画の新鮮味は最高！ ショッキングなラストにはあなたもビックリすることまちがいないし、と断言しておこう。

そしてこの映画を契機として、何がホンモノで、何が虚構かをよく考える必要性を痛感しよう。そしてそれこそまさに、カミュの言う不条理の世界そのものかも……？

## この青春群像劇は超お薦め！

今ドキの普通の学生たちが、「カミュなんて知らない」のは当然。しかし今でも文学（論）の好きな特殊なヤツ（？）はいるはず。多分、柳町光男監督が教鞭をとっていた早稲田大学の「映像ワークショップ」には、この映画に登場するような学生諸君が現実にたくさんいたのだろう。この映画が描き出す青春群像劇の中で展開される男女の恋愛模様も前述のように面白いが、学生たちの小難しい哲学論議や映画論議も面白い。「映像ワークショップ」の学生たちは、松川につきまとうユカリを陰で「アデル」と呼び、中條教授を「アッシェンバッハ」と呼んでいたが、これは『アデルの恋の物語』や『ベニスに死す』という映画を知っていなければ全然わからない話で、いかにもエエカッコしいの学生たち（？）がつけそうなあだ名。

また、カミュの『異邦人』の主人公ムルソーは「太陽がまぶしかったから人を殺した」と語るのだが、それこそまさに不条理の世界そのもの。今ドキの学生諸君にこんな難しい話を真正面から示せば、拒絶反応にあうのが当然。

しかし、「映像ワークショップ」の学生たちの会話の中にそれを巧みに取り入れ、現にムルソーと同じような価値観（？）の高校生を登場させて現実に主婦殺しを演じさせることによって、必然的に観客はその不条理の世界に引きずり込まれることに。

実に難解なカミュの不条理の世界を、このようにわかりやすく示してくれるこの映画は、大人のみならず学生諸君にも超お薦め。とりわけ、映画関係やエンタメ関係への就職希望の学生は必見の映画かも……。

2006(平成18)年2月18日記